

目的 妊婦服では、月令につれて変異する体型に合わせた衣服がまず望まれる。しかし、それが動作の妨げになったり、日常動作を億劫にするものであってはいけない。妊娠後期の妊婦を対象として、動作時の体型変異量を逐時的に計測し、着衣実験による適合性について考察を試みたので報告する。

方法 被験者は妊娠26週前後から38週頃までの妊婦20名、うち経産婦3名で平均年齢28.5才の健康な女性である。被験者の経時的体型変異の状態を1~2週毎に計測し、その推移をとらえた。計測項目は長径9項目、幅・厚径8、周径8、体表に沿った長さ11、体重を加えて37項目とした。さらに、動態時の変異量を知るために、椅座位、前屈などによる胴縦囲、前・後股上寸法および周径について計測した。同様の動作変異量を、対照となる19才女子12名について求め、その結果を比較検討した。厚径・周径の増加率が顕著にみられる32週前後の体型をもとにスカートを作製し、着用実験を行う他、オーバーオール着用によるストレスの状況を筋電図から読み取った。

結果 38週の体型を26週のそれに比較すると、胴部厚径では $\bar{x}$ 18.5%、 s 6.9%、水平胴囲では $\bar{x}$ 16.5%、 s 3.4%の増加がみられた。最大前屈時には、前股上・前W.L.中心~右肩中心の長さは静立時と比較して $\bar{x}$ 23.1%減少し、逆に後股上・後W.L.中心~右肩中心の長さは $\bar{x}$ 14.7%増加した。したがって胴縦囲はわずかに減少するが、オーバーオール着用時の前屈では、前面で衣服が余るものの、後面に負担が加わることが筋電図より読み取れた。若年女子との比較では、妊婦の胴囲の増加量が有意に大であることがわかった。